

## パブリック・インボルブメント (PI) における「検討すべき代替案」について

外環PIにおける最大の問題は、「検討すべき代替案」が存在しないことである。

先のPI外環沿線協議会で、戦略的アセスメントの考え方を引用して、「無い場合との比較は？」と問うた時、「今の議論こそが無い場合との比較である」との回答があった。しかし、実際のところ、「検討すべき代替案」が存在しないため、比較検討すべきものが無く、今の構想案の是非に議論が偏り、議論が先鋭化するばかりで、議論の成果が得られ難いことに、大きな問題がある。しかも、時によっては、一足飛びに計画の必要性を超えて、今が構想段階であるにもかかわらず、「土地の収用は？」という住民の声まで飛び出すことさえある。

「合意形成研究会」添付資料によれば、フランス、ドイツの場合、ゼロ代替案（当該計画に依らず、他の手段によって、当該計画の目標としている効果を得ようとする案＝何もしないこととは異なる）が設けられている。また、アメリカでは、NEPA プロセスにおけるPIに関する規定の中で、「何もしないという案」を含めることが定められている。実際、フランスでもアメリカでも、必ずと言ってよいほど、どんな道路計画にも、「造らない」という選択肢を含む複数の代替案が用意されている。

そもそも何のためにこの事業を計画するのか、その事業の目的は何なのかということについて、具体的な計画案を出す前の構想段階で、市民等と認識を共有することが重要であり、そのためのPI手法である。その場合、「造らない」を含む複数の代替案を設定し、それぞれの案に対する客観的な評価に関して、市民等と認識を共有することが必要である。

「市民参画の道づくり（市民参画型道路計画プロセス研究会・編）」によれば、設定された目的の構成に資する複数の代替案を設定する、目的の達成度合いを測るための評価項目を選定し、定量的な評価が可能な項目については具体的な指標を設定する、が提案されている。

このような手順を経て、市民等が「案の妥当性」に関する認識を共有できる。

外環PIの場合、

今、提示されている構想案、

圏央道、中央環状が出来た場合との比較、

環状八号線を整備した場合（エイトライナー構想を含む）との比較

何もしない場合との比較、

などなど比較すべき代替案が容易に想定できるのに、何も想定しないことに議論の閉塞感が生じる。

PIの質の向上を図るためにも、複数の代替案の設定を求める。